

田澤義鋪～ふたたび歩み出す郷土の偉人～展 ギャラリートーク

日時：令和4年4月10日

場所：エイブル3階 研修室

講師：高橋 研一

(鹿島市民図書館学芸員)

『鹿島歴史文庫 田澤義鋪～今につながる政治教育の「源流」～』 刊行記念

「史料が語る政治教育者 田澤義鋪の生涯と功績」

おはようございます。鹿島市民図書館の学芸員の高橋と申します。今日は、床の間コーナーで展示をしている田澤義鋪展の関連事業ということでギャラリートークをさせていただきます。この地域では、田澤先生と呼ぶのが普通かと思いますが、今日は敬称を略して話させていただきます。

先ほど永池館長から説明があったように「地域の偉人漫画を作りませんか？」という話があり、漫画製作が決定しました。その後、「義鋪について書かれたものは、過去にもたくさん出ているから、それと重複しないように」という注文がありました。つまり、「青年団」というような観点ではなく、新しい視点から義鋪の生涯を描いていくということになりました。



講師 高橋 研一



田澤義鋪
(日本青年館提供)

そこで注目をしたのが「政治教育」という言葉です。きっかけは、鹿島市の明治維新150年事業を行うにあたって義鋪の日記を見つけました。これまで全く非公開だったものを見つけ、『日記が語る田澤義鋪の実像』という資料を編纂しました。この時、実は日記だけではなくて義鋪が書いた手紙や論文など、公開されていた資料を可能な限り調査しました。

すると、これまで「青年団」が表に出ていた義鋪のイメージと違って、「政治教育」を繰り返し説いている義鋪の姿が浮かび上がってきました。「青年団運動も政治教育の一環だ」という表現がよく出てきたのです。「義鋪の本質を何処に見出してくのか」という時に、「政

治教育」というところが非常に重要なのではないか。おぼろげながら、この日記の編纂を通じて感じていたことでした。

「この政治教育という観点から義鋪の生涯を見返していくと何が見えるのだろうか、これまでとどのように変わって見えるのだろうか」というところから、「政治教育に注目をした原作本の執筆を進めよう」ということになりました。

漫画本を作る基本的な理由は「子供たちが地域を学ぶ教材として使うため」ということです。選挙年齢が引き下げられ、「政治教育とはどうあるべきか」が学校の課題になってきている中で、この政治教育を説き続けた義鋪の生涯から「今に活かせるものがあるのではないか」というのも考えながら原作本を作りました。私と神戸女学院大学の河島真先生との共著になります。河島先生は近代日本の研究者として、特に戦前の内務官僚の研究者としてよく知られている方でした。この河島先生が、2017年『日本近代の歴史 5 戦争とファシズムの時代へ』という書籍の中で、初めて義鋪を顔写真付きで紹介しています。

佐賀ではなくて日本全体の近代史の中で義鋪の名前が登場するのは、おそらくこれが初めてで、義鋪を日本近代史の中に位置づけて、義鋪の思想や活動を意義付けられています。そこで、私は飛び込みで先生に講演の依頼をしました。すると、快く引き受けていただき、2019年にエイブルで『内務官僚田澤義鋪の国家構想』というテーマで講演をしていただきました。今回も河島先生にご協力いただきたいとお願いし、ご快諾いただきました。

その次は、どういう方針で編纂していくかということになります。

まず一番目は、「郷土の偉人の事績を通して、現在並びに将来の問題を考える」というところです。歴史学とは決して過去を振り返るだけではなく、今の社会問題をどう解決していくか、というヒントを先人達の取り組みから学ぶ学問です。後ろを向く学問ではなく、前を向いて進んでいくために先人たちに学ぶ学問ということになります。



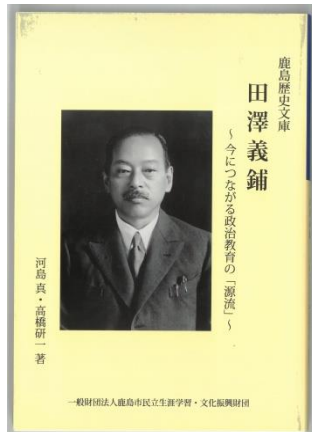
ギャラリートーク風景

特に、義鋪の考える政治は、「いま社会で起こっている様々な問題をどのように解決していくのか」というのが根本にあります。だから、この本を通じて「身の周りにある様々な問題を見つけて主体的にその問題を解決していけるような人材を育てていくこと」が義鋪から私たちが学ぶいちばん大事なことではないかと考え、方針の一番に立てました。

それから二番目は「義鋪がどのような時代に生きて、どのような政治を目指してどのように行動し、そしてその構想がどのように現代に引き継がれているのか」ということです。義鋪は、戦前の社会に生きた人ですから、天皇制国家の中で思想や言論にも制約があったはずですが、その中で、どのようにもがき苦しみながら言葉を絞り出していったのか、とい

うところを丹念に見ていくことになります。義鋪の一つ一つの言葉を簡単にピックアップして今に生かそうというよりは、どのような状況の中でその言葉が絞り出されたのか、というのが非常に重要になってくると思います。

以上をふまえて、完成したのが『鹿島歴史文庫 田澤義鋪～今につながる政治教育の「源流」～』です。この書籍は以下のような8章で構成しました。



『鹿島歴史文庫田澤義鋪』

第1章は、「鹿島で受け継がれてきた政治教育」。鹿島藩以来、ずっと根付いてきた鹿島の文化風土の中から義鋪が登場したのだ、という鹿島の地の重要性を指摘しました。

第2章は、「政治教育者 田澤義鋪の誕生」。義鋪が大学に進学して以降、政治教育者としての活動を始めていく、具体的な様相を、河島先生に書いていただいています。

第3章は、「田澤義鋪の政治思想」。政治教育者としての義鋪がどういう政治構想を抱きながら活動していたのか、河島先生にピックアップしてもらい、まとめていただきました。

第4章は、「青年への政治教育」。これまで馴染みのあった修養団運動、連合青年団に関する記述をしているところです。

第5章は、「女性への政治教育」。これまでの義鋪は「青年団」のイメージがあり、男性との関わりが強かったように思われています。その義鋪が、女性の政治参加についてどのように関わってきたのか、新しい視点から描きました。

第6章は、「国民への政治教育」。義鋪が選挙の出馬を断ったことや選挙粛正運動の中でどのようなことを訴え続けていたのかを書いています。

第7章は、「未来に託した政治教育」。ここでは、晩年の義鋪の生涯を辿っています。

そして、終章が「受け継がれる思い」として、まとめました。

まず、この本で訴えたかったことは、義鋪は鹿島で育って一人で勝手に優秀になったわけではないということです。家庭や藩校・学校で、教育を大事にするという文化を鹿島の人たちが代々受け継いできた。そういう鹿島の風土の中で義鋪は成長し、盟友たちとの関わりの中で義鋪という人物が形成されていったということです。

鹿島藩9代藩主の夫人だった篤誠院は、6歳で13代藩主になった鍋島直彬に徹底した教育を施し、さらに、鹿島藩士の妻や娘を集めて作法や武芸を身につけさせます。彼女たちが家庭に帰って産み育てた人たちの筆頭が、田中鐵三郎と田澤義鋪になってきます。

鹿島中学校（現 鹿島高等学校）を卒業した義鋪は、熊本の第五高等学校に進学し、後藤文夫と出会います。大分県出身で、田澤と同じく内務官僚になった人です。政党内閣が腐敗し崩壊したあと、新官僚のリーダーとして活躍しました。義鋪は、民間の立場から後藤

の政治を補佐していく役割を担っています。後藤は戦後、日本青年館の理事長として、義鋪の顕彰事業を展開するなど、盟友だったのです。

義鋪は、帝国大学で政治を学び、静岡県の安倍郡長になります。役所の中だけで仕事をするのではなく、地域がどういう課題を抱えているか、自分の目で見てまわりました。そして、農村の青年たちの実状を知り、仕事に支障のない夜間に補習授業を行いました。農業をしっかりとやってほしいという地域の思いと学びたいという若者の思いを両立させたのです。

そうした取り組みの中から、義鋪は青年団に目覚めていきました。そして、青年団の意義を社会に大きく知らせたのが明治神宮の造営での活躍です。神宮の杜も、全国の青年団に協力してもらいながら形づくられたものになります。

この事業の後、義鋪は内務省を退官して、財団法人協調会の常務理事に就任します。第一次世界大戦後、日本でも社会運動が活発になり、資本家と労働者の協調を図る必要があったのです。大正11年(1922)、義鋪は、スイスのジュネーブで開かれた国際労働会議に日本の労働者代表として出席しました。そして、会議後にヨーロッパ諸国を歴訪していますが、そのことが義鋪が政治教育者として生きる決意をすることにつながったと私は考えています。

第一次世界大戦の戦勝国も敗戦国も国内の混乱は変わらない。民族対立や階級対立の中で、国によって対応の仕方が違い、なんとか秩序を保っている国もある。それぞれの国を観察して、政治教育がいかに大切かを実感したのです。

翌年の大正12年、関東大震災が起こります。社会の秩序が乱れ、ヨーロッパで見た光景が義鋪の目に前に出現したわけです。これをきっかけに、「新政社」という政治教育団体を作り上げました。『新政』という雑誌の発行と出版事業、全国を回って行う政治教育講習会が主な活動でした。

義鋪は、政治教育について大きく三つのことを言っています。

一つは、「政治の本質というのは、国民生活の向上だ」ということです。政治とは生活そのものだということです。もう一つは、「立憲政治の精神と運用」。これは、中央においては立憲政治を行うこと。三番目に、「地方政治の精神と運用」。地方においては、地方自治が大事だということ。そして、政治情操という感情です。これをしっかりと学ぶと一人ひとりの国民が、きちんとした政治の知識を持つことができる。

義鋪が繰り返し説いたのは「政治は闘争ではなく協力である」ということです。これは今の社会にも立派に通用することだと思います。今、義鋪の著作を読み返すことは決して無意味な作業ではないと思っています。

ここで、私が心に残っている義舗の言葉を紹介したいと思います。

まず、「彼らの政治から我らの政治へ」という言葉です。一人ひとりが自分の生活に関わりのある政治にしていくために、選挙の費用を有権者が負担する。自分が支援したい候補者に決められた額を寄付し、投票したあとも「これからあなたの4年間をしっかりと見えますよ」と意思表示をする。それが「我らの政治」ということです。

それから「出たい人より出した人」という言葉。私たちには、立派な人に立候補を懇願して、その人に選挙に出てもらう義務があるんだということです。

そして、議員として会議に参加したら、自分の意見に固執せず、簡単に多数決で決めずに、みんなの意見を持ち寄って、国民にとって何が一番かを考える精神が大切だと考えています。

では次に、こうした政治思想を抱く義舗が具体的にどのように行動していったのかを紹介します。

まず、義舗が政治構想を実現させていくうえできわめて重要な団体であった新日本同盟を紹介します。新日本同盟とは、義舗、後藤文夫、丸山鶴吉（内務省から警察関係の要職を歴任した人物）たちが中心となって、大正14年に設立された団体です。

当時、日本は貧富の差が拡大して階級問題が起こっています。労資の問題ではなく、社会全体の問題と捉えた義舗たちは、それぞれの立場から問題解決していこうとしました。ただひとつの立場だけでは視野が狭くなる。そこで、自分とは立場の違う人たちと交流し、政治構想を練る。そういう場所の一つとして「新日本同盟」があったと考えられます。

義舗の政治運動の一つは「選挙肅正運動」です。当時は、選挙に行ける人が人口の5.5パーセントくらいです。選挙にまつわる汚職や腐敗をなくすために、「選挙を正しく行うような環境を作っていこう」という運動です。

それと並んで、「政友会、政友本党、憲政会の三つの政党に投票しないようにしよう」という三党拒否同盟運動を起こします。この三党は、いずれも地主と資本家が支持しており、一部の富裕層だけの政治になってしまっていたからです。つまり、社会問題の一方の極にある労働者の意見が反映されていなかったのです。

それを踏まえて、義舗がどういう政治構想を持っていたかということ、中央においては「三党鼎立型政党政治」という理念を掲げます。これは、先ほどの富裕層だけの三党ではなく、イギリスの政治政党を模範としています。簡単に言うと、資本家、中産階級、労働者、それぞれを支持基盤として、それぞれの代表者として国の政治を行う人たちの政党を作るのが大事だということです。

地方においては、「農村共同自治体制」というのを述べています。地方の政治に政党が関わるべきではない、というのが義舗の持論です。江戸時代の村は、「みんなで話し合って協力していく」という良き伝統を持っていた。明治時代以降は、行政に関するものは行政で話し合い、教育に関するものは教育者だけで話し合うというように連携をしなくなった。

それぞれで理念が異なってしまう、団結できなくなった。だからこそ、各分野の代表者が集まって地域のことを議論し、決めたことを守っていきましょう。それを地方自治のあり方にしましょう、ということです。

では、女性の政治教育について義鋪がどういうふう考えていたのか見ていきましょう。

第一次世界大戦後、ヨーロッパ諸国では女性参政権が認められていきました。そのころ義鋪は、新政社の中に「大成婦人会」を結成します。これは、女性が政治教育を受けて、自ら学んでいく場として作ったものです。義鋪はもちろん、下村湖人や安積得也（戦前内務官僚を務め、戦後、公明選挙連盟の常務理事に就任。義鋪が自分の後継者として期待していた人物）などが講師を務めました。安積の妻の政子も優れた人物で、義鋪の妻の節子はこの政子に学び、政治のありかたを理解していきました。実は、鹿島市最初の女性議員は、この田澤節子です。



安積得也・政子夫妻
(日本青年館蔵)

最後に、義鋪が取り組んできた政治教育、政治構想が、戦中・戦後、どのようになっていったのか、という話をしたいと思います。

日中戦争以降、日本は国を挙げて強力な戦争遂行体制を作っていきます。そのとき、自治の精神に基づいて活動しようと、義鋪が作り上げてきたものが、利用されてしまいます。上の意見を、下に徹底させるものに変える。青年団も選挙粛正運動もそうです。青年団は、若者を戦争に導く軍事訓練の場に変えられる。選挙粛正運動は、国が「この人に投票しなさい」という仕組みに変えられていく。東条英機内閣のときに行われた「翼賛選挙」に変えられました。

義鋪は「こんなはずではなかった」と思うけれども、周りからは「あの人が創始者だ」と言われる。彼は、憂いながら亡くなっていくわけです。と、これまでは描かれていましたが、今回、私たちが作った漫画では「鹿島が生んだ現代日本の設計者」としています。それから、原作本のほうは「～今につながる政治教育の「源流」～」として、「義鋪の死によって全てが途絶えたわけではない」ということを強く出しているわけです。それは、戦後、平和国家に向けたいろいろな動きが起こっていく中で、見直されて再評価されたのが義鋪の政治構想だったからです。

例えば、教育基本法の中には、政治教育に関する規定がしっかり盛り込まれています。それから、選挙粛正運動は、公明選挙運動、明るい選挙運動と名前が変わりながらも、今でも引き継がれていっています。労資協調に関しても労働三法が制定されました。また、女性の全面的な政治参加も当たり前の世の中になりました。

義鋪がやってきたのは、今、私たちが生きている社会や政治の仕組みにしっかり反映されているのが見えてきます。

もう一度言わせていただきたいのは、義舗の政治教育の根幹にあるのは「立場を越えて人として向き合い、話し合っ、相手のことを重んじながら生活していくのを教えること」です。

これから、また新しい田澤義舗の顕彰事業が始まります。

今まで見てきたように、義舗の活動や思想は幅が広いです。政治教育や社会教育は当たり前ですが、民族や伝承芸能にも強い関心があります。それから、西洋美術や西洋哲学、文学にも造詣が深い。義舗の日記にも、どういう本を読んでいたのか書いてあります。

義舗の活動と視野がこのように多岐の分野にわたっているということは、一人の目で義舗の全体像を描くというのは、たぶん無理だろうと思います。各分野の専門家の視点から総合的に見ていく必要があると思っています。

それから、義舗の日記や書簡、政治評論を読んでいくことにも意義があります。また、義舗を取り巻く盟友たちの足跡と思想も併せてみていくと、集団の中での義舗の姿が見えてくるでしょう。

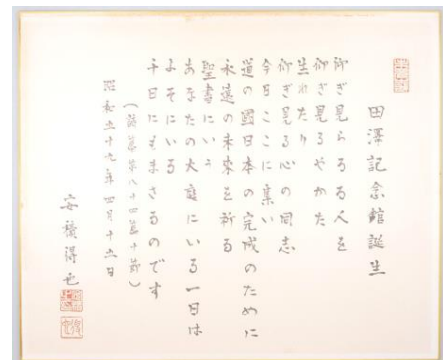
このように総合的な研究と資料集が揃うことによって初めて本格的な義舗の伝記を作ることができると思います。

昭和 59 年(1984)、義舗の生家跡に「田澤記念館 (現 田澤義舗記念館)」が建設されました。そのときに、安積得也が贈った詩を紹介します。

仰ぎ見らるる人を 仰ぎ見るやかた 生れたり
 仰ぎ見る心の同志 今日ここに集い
 道の国日本の完成のために 永遠の未来を祈る
 聖書にいう あなたの大庭にいる一日は
 よそにいる 千日にもまさるのです

田澤義舗から学ぶことはまだまだあります。義舗の顕彰事業を新たにスタートさせるという決意を込めてこの詩を紹介させていただきました。

ご清聴ありがとうございました。



安積得也詩
 (田澤義舗記念館蔵)